

小学校の校内研究のあり方

報告者 センター協力研究員（練馬区立豊玉南小学校校長） 渡 邊 由美子

1. 教師としてのスタート

新規採用で入った豊島区立の小学校は、極めて校内研究の盛んな学校であった。新人教育ともいべき研究授業が課され、週に一回もしくは本人が希望した時、学年主任の教師を中心に、実施する教科の主任、また空きの教師が参観し、様々な観点から適切に指導をしてくれた。教師の立つ位置、目線、話し方、声の高低、そして教材の解釈、授業の流れ—etc—。

私が最初に指導されたのは、「貴女の話し方は、早口すぎる。もっとゆっくり、そして言葉を選んで!!」ということだった。テープにとって聞いてみると、本当に自分でも何と言っているのか聞き取れない程早口だったのである。他人に見てもらふことの大切さをこの学校の一年目に学んだ。見てもらふたびに成長点を認め励ましてもらい、やる気も高まっていった。

5年目には、全国大会の発表会で理科の授業者に抜擢され、校長室で直に指導案を見てもらったことは、特に印象に残っている。新規採用の学校で、授業に対する取り組み方、そして子どもと共に学び合う授業づくりの楽しさを経験したことは、幸せなスタートだったと、今になってつくづく感じている。学校全体が、子どもと授業について真剣に考える雰囲気満ちあふれていた。日常的に授業を見合うことは普通であり、見せて欲しいといえどいつでも先輩の教師たちは見せてくれた。私の校内研究のあり方についての基本的な考え方は、この時につくられたと思う。

2. 都の教育研究員（道徳）となって

教師生活18年目に東京都の教育研究員となり、「道徳の時間」を中心に、研究を深める機会を得た。各区市部の学校を訪ね、研究員の教師達の授業を見たが、中にはびっくりするほど授業の上手な教師が何人もいた。教材の解釈が深く、子どもたちにじっくりと考えさせている。教師と子ども、そして、子ども同士の関係もよく、参観していて居心地のよさを感じるクラスである。「あぁ～東京は広いなあ。授業づくりに自信を持っていたが、自分はまだまだだった。」そんなことを感じさせてくれる一年間だった。

こんなにも授業づくりに一生懸命の教師達が東京中にいることに、大いに勇気づけられもした。勤務する学校の外に出ないと、こんな充実感は味わえないのか？子育て等もあり、外に出て学ぶ機会を得ることの難しい教師は、学べないのか？校内研究こそ最も身近にあって自分を高められる場なのに何故それが機能しないのか？この疑問は、教頭・校長になって、自然と「校内研究の充実」という課題にぶつかっていったのである。

3. 校内研究とは

校内研究のよさは、・勤務時間内にやれること・経験の浅い人、深い人、年齢差もありで、多様な人たちの多様な考えを聞き合いながらやれること、要するに全員が一緒に取り組めること…にある。しかし反面、勤務時間という制約と、様々に家庭事情を抱える人の集まりでもあることから問題も生じてくる。やっていく中では、遅くまで残らざるを得ないこともあるし、その人達を残し帰宅せざるを得ないこともある。出来るときに出来る人が行うこと、お互いを批判したり、足を引っ張ることのないよう、温かい人間関係の中で研究を進めていくことは、校内研究の基本である。

しかし、この基本をおさえても、校内だけで研究をすすめていくことには限界があることをこれまでの経験で実感している。これが、区の教育研究校の指定を受けることにこだわる理由でもある。

4. 区の教育研究校として

教頭としては一校、校長としては二校目であるが、管理職となって3校とも区の教育研究校の指定を受け、研究発表会を行ってきた。私自身が指定をうけることにこだわる理由はいくつもあるが、①講師を招聘するための予算がもらえる。②指導主事の派遣がうけていない学校よりも優先される。③指導室の応援体制が望める。④二年間続けることで、又二年目に研究発表会をもつことで、良い意味での緊張感が保てる。⑤自主的に行う研究発表会よりも大勢の人が興味を持って参加してくれる——ことが挙げられる。

しかし、指定を受けるにあたっては、三校とも根強い

反対にあった。反対の理由は、①上からの押しつけの研究はやりたくない。②研究紀要づくり、あるいは発表会に向けての準備等で大変忙しくなる。そのため子どもへの対応がおろそかになり、子どもにとってプラスにならない。③研究授業が特別な（立派な）授業になってしまう。普段はそんな授業はやれない。が、主なものである。しかし、毎日の授業を充実させることに異論を唱える教師がいなかったことは救いだった。

そこで①上からの押しつけではなく、授業を充実させることは教師の本務である。②研究紀要の冊子を厚くする必要はない。わかりやすく、誰もが読みたくなるようなものを。量より質で！③発表会のための発表はしない。当日は授業で勝負。授業を見て、改めて冊子を読みたくなるような授業づくりをしよう。…と呼びかけた。

又授業をするにあたっては、・一人よがりにならない。・自分の授業に対しては、常に厳しい目を向けること。・互いに見せ合うこと。世に問うこと。・どんなに忙しくても教材研究なくして授業を充実させることはできないのだから、限られた時間のなかで、精一杯やっていくことを確認し合あった。こうして、それぞれの研究はスタートしたのであった。始めれば一生懸命頑張るのが教師の性で、校長一校目での研究も充実したものになったと自画自賛している。しかし、二年目の発表会を終えるとどうしても「あ～終わったね。この後はしばらくゆっくりと----」という感想が聞かれるのである。

5. 浜之郷小の実践にふれて

毎日の授業を充実させること、それは教師の本来の仕事であるのに、充実させようとするとうとう皆疲れるのだろう。何かが違う？確かに教材研究ひとつとっても決して楽な仕事ではないが、「ようやく終わったー。」と思うようなものでいいのだろうか？そんな疑問を持ち続けていたとき出合ったのが、茅ヶ崎市立浜之郷小学校の実践を綴った『授業を変える、学校が変わる』…であった。早速教師数名とともに浜之郷小学校を訪問した。普通のどこにでもいる子どもたちの姿がそこにあった。何百人もの参観者を目の前にして、気負いもてらいもない自然なままの教師の姿があった。とにかく居心地がよかった。居心地のよさの秘密をさぐりたい、その思いがあって、その後、何度も訪問することになった。

今、浜之郷小学校に続けという思いで、校内研究をすすめているところである。日常的な授業研究を、保護者・地域・他校に聞きながら地道に続ける中で、子どもたちの具体的な姿で授業を語り合っている。この授業研究は、日常の授業を開いていこうというのが基本であるから、

永遠に続く研究であるといっても過言ではない。「あ～終わった。」は存在しないのである。

6. 豊玉南小での校内研究

「一人残らず、子どもの学ぶ権利を保障する。」という佐藤学先生の基本理念のもと、豊玉南小での校内研究をスタートさせた。保障するためには、わたしたち教師の授業改善が不可欠である。お互いの授業を見合い、学びあってこそ授業の質も向上する。しかしこの研究の一番の壁は自分を開くということに対する抵抗であった。特別に設定された授業研究ではなく、全員が繰り返し授業研究を行っていくためには、一人一人が日常的に自分を開き、厳しい批判を受けなければならない。抵抗も当然のことであった。この壁を乗り越えることができたのも浜之郷小学校の先進的な実践にふれたおかげである。浜之郷小学校無くしては本校の研究のスタートは無かったといっても良い。

この研究を初めて3年目になるが、研究の基本的な考え方や実践については、教職員もよく理解するようになり、積極的に進めてきている。進め方は以下の通りである。

◎研究の概要

< 1 > 授業研究の日常化

(1) 授業研究を年間3回以上おこなう(平成14年度より)こととした。

何故、一人3回以上にこだわるか。それは、授業が変わり教師が変わるためには、年間1回では、自分の授業を振り返りながら授業の改善に取り組めない。1回目の授業を行い、協議会で出された意見を参考にし、自分なりに改善を試みながら2回目の授業を行う。さらに、自分なりの改善を考えて3回目の授業を行う。ここまでしなければ、授業は改善されないと考えている。更に授業を公開するという事は、授業だけでなく学級を見てもらうことにつながる。授業を通して学級作りをしていくという意識を持つようになっていき、授業を大切にすることが、学級作りの大きな柱となっていく。

(2) 自分らしい授業を目指すために、自分の持ち味と主張を生かした授業を目指すことでお互いに刺激し合い、授業を創造していく。

(3) 授業が始まったら、指導案、事前の計画にこだわらない。どんなに素晴らしい指導案を立てても、子どもたちが授業に参加していなければ授業とはいえない。授業者は授業を始めたら、子どもたちが授業に参加しているかを見極め、場合によっては指導案にこだわら

ず授業を修整していくこともある。

- (4) 授業を観察する側は、指導案よりもその時間の子どもの学びの様子を観察することが大切なこととなる。授業中の子どもたちの様子を、意識的に観察することで、その授業が成立しているかどうかが見えてくる。授業の見方としても、後ろに座って見るのではなく、横のなるべく前の方に位置し子どもたちの学びを観察する。

<2> 授業づくりの基本的な考え

- (1) 聴き合う関係をつくる。

これを最重点課題とした。このことは、後に子どもたちの学習する態度・意欲に大きな影響を及ぼすことになった。何故なら聴き合う関係を作り出すということは、一人一人の子どもの発言を学校のみならず丸ごと受け入れることが基本となる。そのためにはまず、教師自らが一番の聞き手にならなくてはならない。教師一人一人の発言を大切に受け入れることで、発言した子どもも満足し、聞いている子どもも発言について考える。さらに、どの意見も受け入れるという教師の姿勢は、発言をためらっている子どもに対しても、発言をしてみようと思う意欲喚起につながる。その結果、何でも発言できる関係がクラスにつられることになり、討論によって課題を深めることにつながる。子どもたちが、課題を深めることができるようになると、教師の考えをはるかに超える意見が出てくることも良くある。

このようなことを授業で心がけていくことで、子どもたちの中の発言に対する価値観が変化してくる。つまり、正解や、教師・仲間に認めてもらえる意見だけを思考して発言するのではなく、素朴な疑問や自分の経験から生まれてきた意見などを自由に発言しても良いということがインプットされてくる。また教師がそういうつぶやきを拾ってあげることで、そこから新たな発見や深化が授業の中に見られるようになる。

- (2) 学び合う関係をつくる。

聴き合う関係をつくることを基本とし、討論して物事の本質を見極めていく関係の大切さを大事にしていく。それによって、全ての子どもが学び合う関係を創っていく。

<3> 授業後の協議会の充実

授業後の協議会は、授業者にとっても観察した側にとっても、とても大切な時間である。授業者にとっては、その時間に自分では気がつかない多くのことを観察した人たちから聞くことで、学べる場となり、観察する側

にとっては授業の見方を学ぶ場となる。

お互いが協議会の中で、授業観・教材観を交流しあうことでそれぞれの授業にもちかえり、生かせる場として、大切な時間である。だからこそ、「ご苦労様でした。終わって良かったですね。」的な協議会ではなく、お互いが高め合えるような同僚性に裏打ちされた厳しい協議会としていく。

<4> 週時程等の改善

- (1) 水曜日の6時間目を授業研究の時間とした。時程を工夫することで、多くの授業研究会を設定でき留用になった。
- (2) 講師来校日の、3・4校時は講師と空き時間の教師が授業を参観し、5校時は講師講評の時間とした。授業を行った者が、個人的にカウンセリングしてもらうことで、自分の授業を振り返り、次の授業に生かすことができた。今年度は、19時間、個人カウンセリングの時間を確保できた。
- (3) 朝読書の時間の確保。最近急速に全国的に広まりつつあるが、この朝読書の習慣が付くと、朝のスタートが落ち着いてくる。朝読書の時間を設定することで静かで穏やかな授業を行うことができる。また、聴き合う授業作りの基本となっている。朝読書の時間は、自分と向き合う時間である。
- (4) 会議の精選。会議を精選することで、放課後の時間を確保することが可能になる。

各種委員会（研究推進・生活・特活・学芸体育）の所属を1つにすることで、委員会の人数は少なくなるが、複数のことに係わらなくてすみ、会議の回数も少なくてすむ。

- (5) 授業研究回数、授業公開

平成15年度の間発表会までの授業研究回数は48回である。それ以外にも、単元全てを公開する取り組みも昨年度同様行われた。また大学院生に授業を公開し、年間を通して週2回、3名の院生が授業を観察した。

7. 三年目を終えるにあたって

最初、教師に戸惑いがあったことは確かである。

- 一人年間3回以上の授業研究・指導案は簡単なものでよい。
- 事前の準備より事後の協議会を充実させる。
- 自分らしい授業を目指す。

と、これまでの授業研究のスタイルとは大きく違ったか

らである。

研究を進めていく中で、

- ・今年度異動してきた。最初はこの研究の主旨がわからなかったが、授業を見てもらい、学習指導カウンセラーの、大学院の先生方にカウンセリングしてもらうことで、「聴き合う！」ということがわかってきた。自分の言葉を少なくして、じっくり聞いてあげることができると、子どもも聞くようになってくる。更に小さなつぶやきから話が発展していくことを経験した。
- ・授業研究の回数を重ねることで授業が変わってきた。
- ・学び合う関係の本質を話し合えるようになった。
- ・授業研究の「まな板の鯉」ような緊張感がなくなった。
- ・協議会でいろいろな話が聞けるのが楽しい。前向きな

姿勢になれる…。

- ・年間3回以上の授業研究を行い、授業を開くことに抵抗がなくなり、お互いに授業を見合い成長し合える関係になってきた。
- ・授業を反省的に振り返ることができた。授業研究の回数を多く行う程、授業を振り返る機会が多くなり、より新しい授業の創造に向けて取り組むことができた。
- ・職員室で、常に子どもたちの授業の様子を話し合うことが日常的になってきた。

等々の感想が聞かれるようになり、理解が深まっている。校内研究が教育活動の中心となる学校、今それを目指している。ゆっくりとじっくりと子どもの姿を通して確かな授業づくりに取り組んでいきたいと思っている。